

Live5

作曲講座

vol.3 仮コード、ベース、歌入れ

統合音楽ツールとしての完成度を格段に高め、音楽制作の中核をなすソフトへと進化した独ableton社のDAW「Live5」。「録音&編集」「MIDI打ち込み」「エフェクト&ミキシング」機能はもちろん、「VSTとReWireに対応」といった拡張性、スピーディな作業を可能にする「リアルタイム性の高い操作感」などなど、作曲/パフォーマンスに不可欠な要素をもれなく網羅している。付録DVDビデオでは実際に曲を作りながら「Live5」の機能を紹介しているので、ぜひご覧いただきたい。

まずはドラム・トラック制作

今回は「Live5」付属のドラム・サンプラー音源「Impulse」でドラム・トラックを制作したが、今回はベースとピアノを加えていき曲に肉付けを行ない、ボーカルを取り込んだ後、さらにエディットを施す。

ベースとピアノの音源として使用するのは前回使った付属の音源ではなく、VSTインストゥルメントとして「Live5」を拡張できるソフトウェア音源「PLUG SOUND」シリーズだ（詳しくは右ページ下部参照）。立ち上げ方法はいたって簡単。画面の右部分から「プラグインデバイスブラウザ」を表示させ、任意のVSTインストゥルメントをMIDIトラックにドラッグ&ドロップするだけで自動的に音源がセットされる（写真1）。

続いてMIDI鍵盤を使ったリアルタイム録音の方法を紹介しよう。音源を立ち上げたMIDIトラックの「アームボタン」と画面上部の「グローバル録音ボタン」を押した状態にし、「再生ボタン」を押すことで録音がスタートする。リズムにあわせて鍵盤を弾き、任意の場所で「停止ボタン」を押す（写真2）。「アレンジメントビュー」上に新たな「MIDIクリップ」ができ、これをダブル・クリックすると「MIDIノートエディタ」が開く（写真3）。先ほどの演奏が録音されているのが確認できる。クオンタイズやMIDIノートの細かい修正方法については、次々号のVol.5で詳しく説明する。

次に、鍵盤の演奏が苦手な人のためにマウスを使ったMIDI入力方法。新たな「MIDIクリップ」を作るために、「セッションビュー」にあるMIDIトラック上の「クリップスロット」をダブル・クリックすると空の「MIDIノートエディタ」があらわれる。後はトラックを

DVDビデオで一目瞭然!



M-SWIFT 松下昇平がブラジリアン女性ポータル曲を実際にLive5を使って制作している。

再生させながら、「ドローモード」（鉛筆ツール）でエディタをクリックしていきだけで気軽に打ち込みを行なうことが可能だ。

ビデオではおもにリアルタイム録音で打ち込みを行い、仮のピアノとベースの制作を行なっている。



写真1 ベースの打ち込みに使用したVSTインストゥルメント「PLUG SOUND Vol.2 Fretted Instruments」を立ち上げたところ。



写真2 MIDI鍵盤の演奏をそのまま録音していく。



写真3 録音したMIDIクリップを開いたところ。「MIDIノートエディタ」に録音されたノートが並んでいる。ここから細かな修正を加えていくことができる。

連載予定

vol.1	Live5ってどんなソフト?	vol.4	ギターレコーディング
vol.2	ドラムの制作	vol.5	アレンジを詰める
vol.3	仮コード、ベース、歌入れ	vol.6	エフェクト/ミキシング



profile

M-SWIFT

松下昇平が率いるプロジェクト。ジャズ、ブラジリアン、アフリカ、キューバを通過したそのサウンドは、ディープ・ハウス、ブレイク・ビーツなどクラブ・フィールドのさまざまな音像を飲み込みながら、新たな領域へ発展している。現在、2ndシングル、1stアルバムを制作中。

ableton Live5

対応OS：Windows 2000 / XP、
Mac OSX 10.2以上・
10.4対応

価格：オープンブライス
(市場予想価格：
5万2,545円前後)

問い合わせ先：
(株)ハイ・リゾリューション
www.h-resolution.com



楽々オーディオ・エディット

トラックのおおまかな形ができたので、ボーカル素材をAメロ、Bメロ、サビといったパーツごとに分けそれらをトラック上に配置していく。

まずは、あらためてボーカル素材の取り込み方を紹介する。「Live5」の「ファイルブラウザ」から、もしくはPC上のフォルダから直接取り込みたいオーディオ・ファイルをアレンジメント・ビュー上のオーディオ・トラックにドラッグ&ドロップする。すぐにファイルの解析が行なわれ、自動的に「Live5」と取り込んだ素材のテンポ



写真4 取り込んだオーディオ素材は、「Warp」機能により自動的にテンポが調整される。今回は素材をオリジナルのまま使うので、この機能をオフにする。

が調節される。今回の制作では、あらかじめボーカル素材のテンポを調べ、そのテンポでトラックを制作しているので、画面下部の「Warp」ボタンをクリックしこの機能を無効にする(写真4)。こうすることで、ボーカル素材をオリジナルのテンポで扱うことができる。

あとは曲の展開に合わせてボーカル素材を分割し、それぞれを配置することで完成となる(写真5)。この他にも「Live5」には他のDAWにはない柔軟なオーディオ編集機能が多数搭載されているが、このあたりは次号のVol.4で詳しくご紹介しよう。



写真5 「アレンジメントビュー」上での波形編集。切り取りたい部分は、そこを選択した状態で「右クリック 分割」。ファイルはドラッグ&ドロップで移動できる。

使い勝手の良い拡張音源「PLUG SOUND」



SOUND Vol.4 Hip Hop Toolkits」、シンセを詰め込んだ「PLUG SOUND Vol.5 Synth Collections」、最高級のGM音源を実現した「PLUG SOUND Vol.6 Global Collection」と計6タイトルが揃っている。すべてのタイトルを1パッケージにまとめたお得な「PLUG SOUND Box」もある。

今回の制作に使用した「PLUG SOUND」シリーズは、VST 2.0 / AU / RTAS / MAS / DXiといったプラグイン・フォーマットに対応したサンプル・ベースの音源。WindowsでもMacでも使用できる。32bit処理による高品位サウンドとCPU負荷が軽いのが魅力で、「Live5」との相性もすこぶる良い。

ビデオでは、ピアノとベースの音源にそれぞれ「PLUG SOUND Vol.1 Keyboard Collection」と「PLUG SOUND Vol.2 Fretted Instruments」を使っている。この他にも打楽器に特化した「PLUG SOUND Vol.3 Drums & Percs Elements」、ヒップホップ・サウンドの「PLUG

PLUG SOUND Box

「PLUG SOUND」シリーズ全6タイトルを網羅したBoxセット。ソフトウェアで制作環境を完結させたい場合は、こちらの方がコスト・パフォーマンスが高い。



価格：PLUG SOUND Box = 4万7,040円
PLUG SOUND Vol.1 ~ Vol.6 = 各1万5,540円

問い合わせ先：(株)ハイ・リゾリューション
www.h-resolution.com